

ヨーロッパ温泉地の訪問印象記

原 田 英 雄

岡山大学温泉研究所温泉内科学

(1983年1月7日受付)

旅行、とりわけ外国旅行は幾度重ねても心躍る思いがする。ことなつた **mentality** をもつ人々との出会いはいつも **inspiring** だからである。反面、たまつた仕事の山を帰国して見るのがつらさに、はやる心にもついブレーキがかつてしまう。いつものように昨年も“さて今年はどうしようか”と迷っているところへ世界消化器病学会から招待状が舞いこんできた。昭和57年6月14日から1週間、ストックホルムで開催される第7回世界消化器病学会において慢性膵炎のシンポジウムを行なうから出て来ないかと言うものであつた。それではと、ついその気になつてシンポジストを引き受けたが、その後温泉研究所への赴任がきまつて、急遽ヨーロッパの温泉研究所訪問をも兼ねようと思つた。仕事の都合で2週間以上は日程のやりくりがつかず、したがつて温泉研究所訪問には9日間しか割くことができなかつた。短時日の訪問故各論にわたつての視察は無理と覚悟し、彼等の温泉療法に対する情熱を肌で感じることを主目的におき、できればさらに医療技術と社会制度を織りこんだ温泉地医療のあり方、治療医学から予防医学への展開の実情、温泉療法研究の **methodology** における発想の状況について、いくばくでも見聞したいと考へた。

森永寛病院長から御意見をお聞きしたうへで、チェコスロバキアの **Dr. KRIZEK** (マリアンスケラズネ)、**Dr. BENDA** (カルロビバリー)、フランスの **Dr. BESANCON** (パリ)、**Dr. LOISY** (ヴィツシー)、西ドイツの **Dr. BAAS** (メルгентハイム) を訪問することとし文通による日程の調整に入った。加えてフランスの **Dr. SARLES** (マルセイユ) を訪ねることになつていたので9日間に6カ所を訪問するハードスケジュールとなつた。

ストックホルムの学会でシンポジウムと一般演題の発表を終えた後ヘルシンキ経由でプラハに向つた。熱水地球化学部門の酒井教授および地殻熱学部門の松井教授の紹介により **Dr. PACES** 一家および **Dr. JAKES** にいろいろお世話頂いたお蔭でプラハ、マリアンスケラズネの旅行は真にスムーズなものとなつた。ただし、汽車の中や街行く人々には英語が通じにくいために、交流を楽しむ私としては多少淋しい思いをした。マリアンスケラズ

ネは地理的・歴史的な背景もあつてドイツ語が通じるのだが私の方が頭の中で作文しながらたどどしく話すので楽しむと言ふような余裕はなかつた。**Dr. KRIZEK** は多忙にもかかわらずディスカッションに加えて源泉に次々と案内して下さつた。お蔭で舌先による泉質の鑑別を楽しんだが、美味しさのあまり少しづつ胃の方にも入れながら巡つたためについ **Diarrhea** してしまつた。翌日カルロビバリーに行く予定であつたが **Dr. BENDA** からアポイントの手紙が届いておらず、彼の主催する国内学会の会期中でもあつたので、突然訪問してお邪魔するのもどうかと考へて次の機会にゆずることにした。帰国して判明したことだが **Dr. BENDA** の招待状は5月25日に発送されていながらもかかわらず6月29日にやっと日本に届いており、“学会中だが喜んでお会いする。その際参加会員にも会えるだろう”と言ふ主旨のものであつた。航空便が何故1カ月以上もかかつたのか明らかでないがまことに残念な思いがした。そのような理由で、1日プラハの街を見物することができた。6月23日プラハを出発し、**BESANCON** 教授にお会いすべくパリに向つた。みずからオルリー空港まで自動車でお出迎え頂き恐縮した。教授はノートルダム寺院に隣接した **HOTEL-DIEU** 病院の一面を与えられ、ヴィツシーの泉水をとり寄せて研究を行なつていた。午後の半日を使って研究室を見学しディスカッションを行なつたが、研究に対する情熱もさることながら学生の教育に対する情熱には心うたれるものがあつた。パリの街は訪れるたびに現代化の波に浸蝕されていくような印象をうけ、そのいたましい姿を見るにしのびず散歩にも出なかつた。

翌24日 **SARLES** 教授にお会いすべくマルセイユに向つた。同じフランスでも南部は風物・人の気質がまるで異なつてゐる。到着した瞬間からまるで南イタリアに来たような錯覚をおぼえた。**SARLES** 教授のところでは約1時間講演をした後研究室スタッフとのディスカッション、研究室の見学をした。海岸特有の美味しい魚料理とワインを賞味しながら、研究・医療制度・教育問題など多岐にわたる議論を楽しんだ一夜は忘れぬものとなつた。**BESANCON** 教授からの依頼でヴィツシー温泉の泉

水を使って胆膵系疾患に対する効果を実験的・臨床的に検討したこともあったそうだが、SARLES 教授自身は批判的な意見の持主であった。翌25日 Dr. LOISY にお会いすべくヴィッシーに向った。ヴィッシーでは時間的制約もあり、主として消化器疾患の温泉療法を見学した。種々の疾患が扱われていたが、私の印象では消化管の functional disease に力点がおかれつつあるように思えた。米国留学時代に migrane に興味をもったことあるので migrane の温泉治療も興味深く見学した。翌26日(土)、27日(日)は休日のため研究所訪問は困難とあきらめ、レンタカーを借りて26日はアビニオン地方、27日はシャモニーで休日を楽しんだ。27日にジュネーブにひき返し、フランクフルト経由でビュルツブルグに向った。28日メルゲントハイムに BAAS 教授を訪ね、見学・Discussion の後再びビュルツブルグ、フランクフルト経由にてパリに向った。帰途ロマン街道の一部を車の中から楽しんだ。翌29日パリを出発して帰国の途についた。帰国すると30日メ切の原稿が2つも待っている、仕事もある、そのほか書類が机の上に山積している、と考え始めた頃には夢からさめてまた現代のいそがし人間にもどっていた。

この旅行を通して得たものは実に多かった。温泉療法

にたずさわっている人々の情熱に触れることができた。その呼吸づかいまでが耳に残っている感じがする。

医療技術と温泉が実にみごとに織りこまれていた。これには歴史的に培われた伝統も大きな要素となっているに違いないが、それだけでは説明がつかないものを感じた。温泉利用による予防医学の展開も着実に前進しているように見えた。温泉療法研究の methodology に関しては幾重もの障壁と闘っているのが現状、との印象をうけた。その効果には自信をもちつつも、多因子を如何に解析するか、特殊な場所にある特殊な施設であるが故に Short term の評価は可能であっても Long term の評価を如何にするか、など多くの問題が残っているように思えた。いずれも最終的にはわが国の実情に即した温泉療法、温泉療法研究のあるべき姿と言う課題に直結してくる。温泉療法の空気に触れることなく育った消化器病学者の側からの批判的な見解をきくことができたことも今後の参考として貴重なものとなった。次回は是非もう少し余裕のある日程を組んで各論にわたっても見学してきたいものと考えている。

おわりにあたり、旅行体験記をまとめるようおすすめ頂いた森永寛病院長に深謝申し上げます。